法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

能界展望(平成8年)

竹本, 幹夫

(出版者 / Publisher)
法政大学能楽研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
能楽研究 : 能楽研究所紀要
(巻 / Volume)
22
(開始ページ / Start Page)
183
(終了ページ / End Page)
194
(発行年 / Year)
1998-05-25
(URL)
https://doi.org/10.15002/00020510

能界展望（平成八年）

竹本幹夫

はじめに

平成七年十二月一日付で、社団法人日本芸能実演家団体協議会（芸団協）内に芸能文化情報センターが発足した。舞台芸術に関する情報の集積・発信基地として、ネットワーク・データベース・調査研究・コンサルティングの四部門を設置、シンクタンク機能を充実させるという。平成九年二月にはホームページが開設された。本稿執筆にあたって閲覧したが、内容充実し、日本の芸能界の置かれた状況の概要を理解するためにはきわめて有用と思われる。他の演劇ジャンルとの比較を通じて、現代の能界の置かれた状況がよくわかるからである。本稿は『能楽タイムズ』はじめ能楽関係諸誌はもちろんながら、このホームページにも助けられた点が少なくない。

最近の能界は新作・復曲をはじめとする斬新な試みが踵を接して上演され、そうした活動が社会的に顕彰される反面、実験的試みがブーム化しつつあることへの批判の声もある。現代の能はどこへ向かおうとしているのであろうか。以下この年の主な出来事を列記し、さらに能界全体の動向について卑見を述べたい。

一、主な出来事

【新演出・新作能・廃曲や稀曲の上演】

この年も様々な実験的な公演が行われた。煩を厭わず、諸記録から知られるものを可能な限り列記しよう。

一月十九日国立能楽堂定期公演の「新演出による〈竹雪〉」（友枝昭世）は、堂本正樹・小田幸子台本・演出。二月九・十日茂山狂言会（京都観世会館）で〈栗隈神明〉（茂山千之丞）を昭和四十三年以来二十八年ぶりに上演。十六日梅若会二月定式能での〈松山天狗〉（梅若六郎）は、平成六年の復曲の再演で、今回は梅若六郎演出。九月十六日にも京都秋の梅若能で三演された。五月十八日には大槻自主公演で大槻文蔵も演じている。二十二日国立能楽堂企画公演「試み・再演の夕べ」で新作狂言〈風無し凧〉（野村良介）は演出野村良介・台本補綴田口和夫、同日の復曲能〈雪鬼〉（香川靖嗣）は能本作成西野春雄・演出羽田昶・演出補佐三浦裕子。先代野村万斎初演作品の再演と、平成五年十二月国立能楽堂研究公演の再演である。三月二十二日「国立能楽堂狂言の会・稀曲をみる楽しみ」の和泉流〈折紙聟〉（野村万蔵）は、台本補綴田口和夫。和泉流のみ

の独自曲で、古台本を検討して主題を明確化したという。二十三日「十周年記念梅若六郎の会」で山本東次郎が〈居狸〉を復曲再演。四月四日国立能楽堂「伝統の現在スペシャル」で茂山千作・野村万作ら、異流共演で新作狂言〈こぶとり〉上演。これに先立ち、二月には名古屋で、その他大阪・東京での追加公演など、諸方で公演された。五月八日大槻自主公演で〈三山〉(野村四郎)、二十七～三十日北陸狂言の会で新作〈子ほめ〉(万之丞)。六月十日第二回能楽座公演は国立能楽堂で、二部構成、一部は能の部分演奏でワキ語など、二部は能〈景清〉(粟谷菊生)・狂言〈鍋八撥〉(野村万作)・能〈葵上(古式・空之祈)〉(観世栄夫)。十五日第二回大槻文蔵の会での〈柏崎〉は世阿弥自筆本を一部取り入れた上演。間狂言の起用、住侶による狂女の追い出しのセリフ、子方のセリフ、曲舞前に男舞を挿入するなど。二十日有馬能では〈維盛〉前シテ大槻文蔵・後シテ梅若六郎。二十二日山本順之の会で〈重衡〉の再演。二十八日橋の会は〈逢坂物狂〉の復曲で、節付・型付・演出が主演の浅見真州、監修松岡心平・石井倫子、制作責任橋の会。七月十七日大槻能楽堂自主公演ろうそく能に〈布留〉(山本順之)。二十二日観世能楽堂ろうそく能に〈鵜羽〉(観世清和)。八月七日岐阜県郡上郡明建神社七日祭りに、味方健、江戸期の新作能〈くるす桜〉を上演。味方氏の復曲以来すでに九回の上演を数える由。八月八日東京茂山狂言会の〈死神〉(茂山千五郎)は一九八一年花形狂言会以来の再々の上演。二十一日第二回金剛能楽財団公開能で同流の稀曲〈彭祖〉(金剛巌)。二十二日国立能楽堂企画公演「素謡と袴狂言・袴能の夕べ」の〈武悪〉(則直・万之丞・千五郎)は台本作成羽田昶。一九九〇年六月橋の会公演に基づく改訂台本による試演。二十五日やるまい会東京公演(国立能楽堂)は稀曲〈越後聟〉(野村小三郎)。三十一日能劇の座(梅若能楽学院)では〈浪人盃〉(三宅右近)・〈生贄〉(大槻文蔵)。十月二日東京国立文化財研究所公開講座「鬼狂言の復曲—大蔵虎明本による」(梅若能楽学院)で「復曲〈立山詣〉—虎明本〈くも〉より」(茂山千五郎)・講演「狂言に見る風俗—衆道をめぐって」石井倫子、「鬼狂言の古演出—乱声・責メ・海道下り」高桑いづみ。四日・五日京都上京区寺町今出川上ル十念寺での催しはローソクと灯籠を照明とした味方玄がシテの〈葵上〉と〈鉄輪〉の上演で、講演に味方健「義教と能」。十五日芸術祭演劇部門参加の「狂言遊兎の會」主催公演〈千尋の底〉(石田幸雄)は新作話芸、十七日には演芸部門参加の「蝸牛の会」企画公演「落語狂言〈死神〉」(野村万之丞ほか。後述)は優秀賞受賞作品で、他に新作〈子ほめ〉(野村史高)、〈転失気〉(野村良介)を同時上演。二十四日芸術祭協賛公演として国立能楽堂企画公演「試み・再演の夕べ」は「室町歌謡組曲—遊びをせむとや」(構成演出茂山千之丞、出演も同人ほか)、能〈晶子みだれ髪〉(作＝馬場あき子、演出＝佐藤信、美術＝辻村ジュサブロー、節付＝浅井文義、型付＝三鈷の会、出演は粟谷能夫・瀬尾菊次・宝生欣哉・浅井文義ほか)。二十五日京都観世会館での「沙羅の会」(青木道喜主催)は「宮沢賢治生誕百年記念」で賢治原作の新作狂言〈鹿踊りのはじまり〉(千

五郎)、新作能〈永訣の朝〉(青木道喜)。狂言台本型付青木道喜・演出茂山千五郎・能台本作曲型付青木道喜・笛手付杉市和・小鼓手付曽和正博・大鼓手付河村大。十一月二十六日国立能楽堂には「大須戸能」の公演があり、〈土蜘蛛・棒縛・紅葉狩〉を上演したが、一種の企画物といえる。十二月六日「橋の会」は〈鷹井〉(白石加代子・浅見真州・野村万斎。地謡は観世・喜多混成。高橋睦郎演出)。二十六日の国立能楽堂企画公演「朗読と能の夕べ」がこの年の締めくくりで、皆川博子作「レイミア」朗読(佐藤信演出・篠井英介・岩井ひとみ・二十五絃箏小宮瑞代)。能〈通小町〉をふまえキーツの譚詩『レイミア』を援用した朗読作品。国立能楽堂委嘱作品・初演。皆川博子には〈景清〉などをふまえた幻想的連作綺譚『変相能楽集』がある。〈通小町〉(山本順之)を同時上演して相互的な鑑賞を狙ったものという。

以上の如く毎月こうした実験色の強い企画公演が行われており、この傾向はすでに常態化したといってよい。中には数度の上演を経て、通行曲に近いものすらある。ただし作品の完成度の低いものも少なくないので、やはり実験的な印象はぬぐいきれない。三十年以前は、こうした新しい活動が強く規制されていた。自由度の増した今日の方が、能にとってよい時代ではある。なお「常態化」したとは言いつつも、その担い手は、梅若六郎・大槻文蔵・茂山一門などほぼ限定的で、新しい試みの牽引役を果たしてきた橋の会や、強力に支援している国立能楽堂の存在によって、かなり一般化したようには見えつつも、新しいことをするには、やはり自前の組織力が必要なようである。この問題については、後に再論する。

【能楽養成会関連の話題と横浜能楽堂開館のことなど】

二月二十九日平成五年度開講の第三期能楽(三役)既成者研修生の研修終了発表会が国立能楽堂本舞台で行われ、ワキ方大日方寛、笛方竹市学、太鼓方船越ゆかり、ワキ方則久英志らが技芸の成果を披露した。三月十四日には第四期能楽(三役)研修生の新人研修修了発表会が同所で行われ、二十一日国立演芸場で合同修了式、四月からは既成者研修に進む。またこれら以前に第五期研修生の募集も開始された。四月十二日の第五期能楽(三役)研修生の選考試験合格者十一名が、二十三日国立演芸場で合同開講式、二十五日授業開始。七月三十一日第五期生の適性審査により、笛方一噌流3名、小鼓方観世流2名、大鼓方葛野流1名、太鼓方金春流1名、ワキ方宝生流1名の計8名が専攻の基礎研修に進んだ。八月二十七日には大阪能楽養成会主催、第二十七回東西合同研究発表会が、国立能楽堂にて行われ、京都・大阪の能楽養成会と国立能楽堂研修生・研修修了生・東京の能楽師子弟が参加して、能喜多流〈巻絹〉、能観世流〈猩々乱〉ほか、狂言三番、舞囃子十一番が演じられた。京都・大阪での養成事業も並行して行われている。

能舞台関連では、六月二十八日横浜能楽堂(横浜市文化振興財団)の開館が最大の話題である。竣工は三月。旧染井舞

台(前身は前田家の根岸能舞台)を移築してJR根岸線・東急東横線桜木町駅近くの掃部山公園内に建造。染井舞台は昭和四十年に解体、宝生能楽堂に保存されていたが、横浜市在住の観世流能楽師田辺竹生氏が入手、横浜市に寄贈したもの。建築面積一七〇九平米、延べ床面積五八六三平米の鉄筋コンクリート造、地上二階・地下二階。一階は本舞台、鏡の間、楽屋、見所(一階席四三九席、二階席四七席の四八六席)、ロビー、事務室。二階は見所、研修室(四室)、展示ロビー、喫茶室。地下一階は事務室、第二舞台(カーペット敷き、約百席)、地下二階は駐車場と機械室。七月から一般公開。なお設計大江宏建築事務所、施工は竹中・住友・紅梅JV。第四十一回神奈川建築コンクールで優秀賞を受賞した。山崎有一郎館長の下、現在も積極的な活動が展開されている。

七・八月には喜多六平太記念能楽堂改修工事が行われた。

【そのほかの能関係の文化事業・摘録】

三月十九日〜六月十六日浅井能楽資料館春季特別展「日本の羽衣伝説」では、演能のほか講座・講演会など。七月二十日〜九月一日東京ステーションギャラリーで国立劇場開館三十周年記念「日本の伝統芸能展—雅楽・能楽・文楽・歌舞伎・大衆芸能の世界—」、財団法人東日本鉄道文化財団・日本芸術文化振興会・NHK・NHKプロモーションの主催。文化庁・東京都教育委員会・千代田区教育委員会・東日本旅客鉄道株式会社の後援。能面や宝山寺蔵能関係資料などの展示。八月十日〜九月二十五日林原美術館「備前池田家伝来面展」。九月十日〜十一月二十四日「丹波篠山能楽資料館開館二十周年記念能面展」では、能面百余点とアメリカのスティーブン・E・マービンコレクションの特別出品。会期中講演あり。十月二十四日〜十二月四日国立能楽堂特別展示「根来寺所蔵紀州徳川家寄進の能面」は、第八代紀州藩主重倫が寄進した能面七十九点を中心に。列品講座は「根来寺の文化」(根来寺文化研究所・中川委紀子)、「紀州徳川家寄進の能面」(武蔵野美術大学・田辺三郎助)。十月二十六日〜十一月二十五日「彦根城博物館秋の企画展」は十二代藩主井伊直亮収集品を中心とする楽器・楽書・楽譜などの展示。講演会や雅楽公演も付属。十二月四日〜九年一月十四日、早稲田大学演劇博物館「能楽資料展『能楽の六百年—中世から近代まで—』」は安田文庫や諸機関の能楽資料を展示。同館後期演劇講座として十二月五日「『光悦謡本』追考」(表章)・十二月十一日「安田文庫蔵能楽関係稀覯本について」(竹本幹夫)。

これらとは別に、八月八日に行われた第一回「世阿弥忌研究セミナー」は、研究展望でも言及するかと思うが、紹介したい。世話人天野文雄・大谷節子・小林健二・重田みち・関屋俊彦・竹本幹夫・松岡心平・三宅晶子の発起により、全国的規模で能楽研究者・関係者の参加を得て開催された点に意義がある。同日午前の補巌寺参詣ののち、関西大学飛鳥文化研究所講堂で講演「世阿弥の『遊楽』をめぐって」(表章)、報告「「花の段」以後の『花伝』」(重田みち)、「多武峰の『四カ

ウ』再検」（天野文雄）、「世阿弥の『種』の理論」（三宅晶子）が行われ、引き続き懇親会となった。

このほかでは、五月に『金春流謡曲百番集―外の巻』が刊行（社団法人金春円満井会）された。平成二年刊の内の巻百三曲に続く六七曲で、現行一七〇番が完結。定価三八〇〇〇円。また六月十一日には財団法人片山家能楽保存財団が発足した。理事長は片山博太郎（九郎右衛門）。所蔵資料の保存・活用と芸術・文化の振興を目指す。

【海外公演そのほか】

大阪市・ミラノ市友好都市十五周年記念能楽団が五月七日出発した。一九八一年に姉妹都市提携以来今年が十五周年の由。薪能を公演する。団長大槻文蔵。副団長梅若善高・福王茂十郎。総勢二十六名。二日間の日程で、初日は能〈船弁慶〉、二日目は能〈羽衣〉、狂言〈太刀奪〉、能〈土蜘蛛〉。七月八日には米軍横須賀基地に停泊中の空母インディペンデンス艦上で薪能が行われた。米ネイビィー友好協会の創立五周年記念行事の一つとして、米軍将兵やその家族・関係者を招待。観世芳宏〈高砂〉、野村万之丞〈棒縛〉、観世芳伸〈土蜘蛛〉。十月八日・九日にはパリで興福寺仏教芸術国宝展に伴う演能が行われた。八日はグランパレ美術館にてシンポジウム「仏教芸術と能楽」（加賀・門脇ら）に続き、能〈屋島（那須ノ与一）〉、狂言〈仏師〉、半能〈融（舞返）〉。九日はギメ東洋美術館で、〈翁〉、解説「夢幻能について」加賀乙彦、新作能〈安土の聖母〉作詞門脇佳吉、原作加賀乙彦。梅若猶彦・泉嘉夫・野村万之丞らの出演。

二、受章・褒賞など

◎重要無形文化財各個指定保持者（人間国宝）

粟谷菊生。四月十九日付。「鋭く重厚な技芸」が評価。「シテ方喜多流粟谷益二郎の次男として生まれ、幼少より父から能の手ほどきを受け、初舞台ののち、喜多流十四世宗家喜多六平太、十五世喜多実に師事して厳しい修行を積み、重要演目を次々と披いて実力を示した。今日では能楽界を代表するシテ方の一人として優れた舞台を披露している。その技芸は、切れ味のよい鋭さと重厚さを併せ持つものとして高く評価され、平成四年には観世寿夫記念法政大学能楽賞を受賞している。また社団法人日本能楽会、社団法人能楽協会の役員など、斯界の要職を歴任し、能楽の保存・振興、後継者の養成にも尽力している」のがその指定理由。大正十一年十月生。昭和四十年重要無形文化財「能楽」総合指定保持者。日本能楽会理事、同常務理事、能楽協会常務理事を歴任。平成七年、勲五等双光旭日章受章。

◎芸術院会員

片山九郎右衛門。「片山九郎右衛門氏の細やかな芸は、現代の能の指標とされるもので、古典の保存継承にも尽力している」のが選考理由。昭和五年八月、八世片山九郎右衛門の長男として京都に生まれる。大阪文化祭賞金賞、観世寿夫記念

法政大学能楽賞、芸術祭優秀賞、日本芸術院賞を受賞。
◎春の叙勲・紫綬褒章
宝生閑。四月二十九日付。「多年、能ワキ方として精進し、優れた技量を示してよく伝統芸能の発展に寄与した」。昭和九年東京生まれ。父弥一、祖父宝生新に師事。東京芸術大学音楽学部邦楽科非常勤講師、国立劇場能楽堂養成科主任講師、立正大学客員教授、能楽協会常任理事、日本能楽会常任理事。平成三年、観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞、四年日本芸術院賞受賞。六年、重要無形文化財個人指定保持者。
◎春の叙勲・勲五等双光旭日章
廣田陛一。四月二十九日付。シテ方金剛流。
◎秋の叙勲・紫綬褒章
関根祥六。十一月三日付。「多年能シテ方として精進し優れた技量を示してよく伝統芸能の発展に寄与した」。昭和五年十月、関根隆助の六男として東京に生まれる。二十五世宗家観世元正に師事。昭和四十二年芸術祭奨励賞、五十二年度・五十六年度芸術祭優秀賞を受賞。日本能楽会会員。能楽協会東京支部常議員・能楽協会理事、同常務理事、観世会理事、国立能楽堂研修生主任講師などを歴任。
◎秋の叙勲・勲五等双光旭日章
種田道雄。十一月三日付。シテ方金剛流。
◎観世寿夫記念法政大学能楽賞(彙報参照)
高橋章・天野文雄。
◎催花賞(彙報参照)
善竹幸四郎。
◎芸術祭賞・演芸優秀賞
「蝸牛の会」の企画公演〈落語狂言・死神〉(原作帆足正規、台本演出野村万之丞、出演は野村史高・橋本勝利・野村晶人・野村万之丞)。
◎芸能功労者表彰
柿原繁蔵。社団法人日本芸能実演家団体協議会(芸団協、会長中村歌右衛門)より。明治四十四年三月生まれ。大鼓方高安流。安福春雄・宮原康寿に師事。九州能楽三役会会長。平成三年催花賞受賞。
◎平成七年度大阪文化祭賞金賞(同年十二月二十三日付)
山本勝一。シテ方観世流。大正十四年四月生まれ。山本博之の長男として生まれ、父および片山博通・井上嘉介・先代梅若六郎に師事。市民文化賞・大阪文化賞・市民表彰を受ける。日本能楽会会員。大阪能楽養成会理事・能楽協会大阪支部長・日本能楽会理事等を歴任。
◎平成七年度大阪文化祭賞本賞(同前)
長山禮三郎。シテ方観世流。昭和十八年一月生まれ。観世喜之・観世銕之丞に師事。「能・狂言の夕べ」「芦屋能」「狂言鑑賞の会」を主催。大阪文化祭賞受賞。日本能楽会会員。
◎平成八年度大阪文化祭賞本賞(二名)
山本孝。大鼓方大倉流。昭和十一年九月生まれ。父山本敬一郎および亀井俊夫に師事。日本能楽会理事。大阪能楽養成会講師。日本能楽会会員。大阪文化祭奨励賞・大阪府民劇場

奨励賞・大阪文化祭賞を受賞。
浦田保利。昭和四年十月生まれ。シテ方観世流。浦田保嗣の長男。父および先代片山九郎右衛門・先代観世左近に師事。日本能楽会会員。大阪文化祭賞を過去二回受賞。
◎平成八年度京都市文化功労者
片山九郎右衛門。「古典能を熱心に研究する一方、京都薪能の確立など実験的演出や新分野にも進出した」などにより。
◎平成八年度第十五回京都府文化賞功労賞
片山慶次郎。シテ方観世流。文化向上への尽力により。
◎平成八年度第十五回京都府奨励賞
片山清司。シテ方観世流。新進の芸術家への授与。
◎九六年度京都市芸術新人賞(九年三月二十四日付)
河村大。大鼓方石井流。「気合いと切れのよい演奏と、新作能や他分野との交流、古典の掘り起こしにも意欲的」との理由により。石井流宗家代理谷口正喜に師事。
◎平成八年度名古屋市芸術賞芸術特賞
梅田邦久。シテ方観世流。長年にわたって優れた芸術活動を行い、近年における活動が顕著であることにより。
◎平成八年度第十八回松尾芸能賞新人賞
野村小三郎。狂言方和泉流。「家に伝わるおおらかな芸風を見せ、大曲〈釣狐〉〈越後聟〉に優れた演技を示した。また、新作狂言や他の分野にも積極的に参加し、進取に満ちた活動は高く評価される」。昭和四十六年六月生。父十二世野村又三郎信廣に師事。
◎第四回読売演劇大賞男優賞
大槻文蔵。「東京清韻会別会」(平成八年三月十六日・観世能楽堂)での〈善界(白頭)〉の舞台で「中国と日本の空間性をスケールの大きい宇宙観で描いた成果」により。シテ方観世流。昭和十七年九月、大槻秀夫の長男として大阪に生まれる。祖父大槻十三、父秀夫、観世寿夫、観世銕之丞に師事。数々の大曲に果敢に取り組む一方、復曲活動にも積極的に関わる。大阪文化祭奨励賞、大阪府民劇場奨励賞、大阪文化祭賞、読売演劇大賞優秀作品賞・松尾芸能賞優秀賞などを受賞。日本能楽会会員。
◎優良地方公共団体自治大臣表彰
明野薪能。茨城県真壁郡明野町の薪能実行委員会が平成五年以来薪能公演、すでに四回を数えたが、「住民参加の町づくり部門」で受賞。例年シテ方観世流清水寛二、大鼓方大倉流大倉正之助、狂言方大蔵流善竹十郎が協力。
◎名古屋青年会議所TARG賞
狂言なのり座、井上靖浩・佐藤融・野村小三郎。名古屋狂言会の新たなスタートを切ろうと今春結成のグループ。
◎平成八年度北国芸能賞
飯島佐之六。北国新聞が石川県を中心に活躍した芸能・文化関係者に贈る賞の一つ。飯島氏は大鼓方葛野流。「永年にわたって北陸能楽界を支え、葛野流の神髄に迫る芸境を開き、能楽文化の振興に寄与した」。
◎平成八年度福岡県教育文化功労者

笠井改。筑紫野市在住のシテ方喜多流。県の伝統文化普及協議会会長として、能の普及振興につとめている。

三、襲　名

小鼓方幸清流十五世宗家幸義太郎は清次郎を襲名(四月十日、幸清次郎襲名披露能)。

狂言方和泉流野村信行は、五月十九日やるまい会より野村小三郎を襲名。襲名披露能も別途行われた。

四、日本能楽会・能楽協会関係

◎日本能楽会

【役員構成】

《会長》金春信高

《常務理事》観世清和・金春信高・宝生英照・金剛巌・喜多六平太・宝生閑・金春惣右衛門・善竹幸四郎

《理事》野村四郎・井上嘉久・大槻文蔵・高橋汎・辰巳孝・廣田陛一・大島久見・福王茂十郎・貞光義明・藤田大五郎・鵜澤壽・宮増純三・安福建雄・山本孝・観世元信・野村又三郎

《監事》桧常太郎

【会員数】(平成8年1月1日現在)総数…367名

シテ方…観世176・金春8・宝生27・金剛10・喜多17、小計238。

ワキ方…高安9・福王5・宝生5、小計19。

笛方…一噌5・森田12・藤田2、小計19。

小鼓方…幸9・幸清5・大倉7・観世2、小計23。

大鼓方…葛野5・高安5・石井4・大倉5・観世0、小計19。

太鼓方…観世5・金春9、小計14。

狂言方…大蔵24・和泉11、小計35。

◎能楽協会

【役員構成】

《理事長》片山九郎右衛門

《常務理事》梅若六郎・坂井音重・武田志房・櫻間辰之・廣田泰三・香川靖嗣・宝生閑・亀井忠雄・山本則直

《理事》浅見真州・守屋泰利・朝倉粂太郎・寺井良雄・金剛永謹・大村定・福王茂十郎・一噌仙幸・鵜澤速雄・三島元太郎・中村喜彦・野村万之介

《常務理事・東京支部長》高橋章

《理事・名古屋支部長》野村又三郎

《理事・北陸支部長》山田太佐久

《理事・京都支部長》片山慶次郎

《理事・大阪支部長》大槻文蔵

《理事・神戸支部長》吉井順一

《監事》渡辺三郎・檜常太郎

【会員数】1427名

支部別　東京…614、名古屋…92、北陸…52、京都…190、大阪…254、神戸…66、本部扱…159。

五、物故者

●梅若節夫
シテ方観世流。大阪梅若会所属。平成七年十月二日死去。享年48。

●友枝喜久夫
シテ方喜多流。一月三日、盲腸ガンのため、入院先の新宿区の病院で死去。享年87歳。明治四十一年九月、喜多流シテ方友枝為城の長男として熊本に生まれる。父とともに上京し、十四世喜多六平太、喜多実に師事。晩年視力をほとんど失うも舞台に精進を続け、高い評価を受けた。昭和四十三年芸術祭大賞、五十三年芸術選奨文部大臣賞、六十四年観世寿夫記念法政大学能楽賞、平成元年伝統文化ポーラ大賞を受賞。

●中村保雄
能面研究家。元京都文化短期大学教授。二月六日、心不全のため、京都市北区の自宅で死去。大正八年能面作家中村直彦の次男として東京に生まれる。東京物理学校卒業。京都府教育研究所長、京都府立鴨沂高校校長などを歴任。著書『能面』により昭和五十五年度芸術選奨文部大臣賞を受賞。その他『中村直彦能面遺作集』『能と能面の世界(正・続)』『古面の美』『仮面と信仰』『古代中世芸術論』(共編)、『能面―美・形・用―』など、著書多数。京都新聞文化賞受賞。享年76。

●高橋正次
シテ方観世流。準職分。日本能楽会会員。三月二十日、急性心不全のため死去。享年80。

●朝倉粂太郎
シテ方宝生流。日本能楽会会員。五月十四日脳梗塞のため、東京中野区の病院で死去。享年70。

●佐藤出
小鼓方観世流。九月二十五日死去、享年28。国立能楽堂能楽(三役)養成研修生第一期の修了者。同じく第五期の講師。

●古橋正士
シテ方観世流。十月二十九日死去。享年76。

六、平成八年度の能界 ―まとめに代えて

友枝喜久夫の死により能界はまた一人名人を失った。「名人」というのは、作ろうとして出てくるものではない。また努力して目指すべきものでもなく、自然とその境地に達するものなのであろう。それでは役者も観客も、ただ待てばよいのかというと、何かしなければ将来を切り拓いていくことはできないと考えるのが人間の常であるから、やはり努力はいつも必要なのである。現今の能界において、そうした努力は専ら新作・復曲・新演出の方面において盛んに行われているように見える。この活動に携わるのは、能界の中ではなお少数ではあるが、すでに紹介したように、ほぼ毎月のように新企画が行われている状況は、やはり注目に値しよう。誤解を恐れずにあえて言えば、こうした活動は「わかりやすい」のである。役者の熱意と工夫とが、誰にでも伝わってくるので、

評価もされるし、観客も集まるわけである。実験的側面はなお強いから、舞台自体は必ずしも成功とは言えない場合も多く、名曲の名演を見たような感動からは程遠い場合でも、観客はそれなりの充足感を与えられるのである。これを伝統芸術としての水準に達していないと批判するのはたやすいが、はたしてそれでよいのか。

この年の横浜能楽堂開館に前後して、全国の自治体で次々に能楽堂が建設されている。「新企画」系の舞台公演でも先に紹介しただけあるのに、それを遙かに上回る数の演能会が存在し、また芸術性という点ではかなり問題はあるが、いわゆる薪能も盛況を極めている。そうして名人はいなくなり、新奇な工夫が次々に実験を重ねられているのが、現代の能界である。これをどのように評価したらよいのであろうか。

明治の能楽復興以来百数十年を経過し、能は大きく変化した。明治・大正・昭和前期の名人輩出の時代は、江戸時代以来培ってきた能楽文化の中から生れたもので、町を歩けば謡が聞え、家族の誰かはこの道に多少たしなみがあるという時世の中に花開いた繁栄であった。戦後も名人の余風は続いたものの、この間、町からは謡の声が完全に消えたし、能を見たことのない中学生・高校生・大学生が大量に生み出された。学校で能を見せることすら少なくなった一方で、その子らの多くは、幼児期に西洋音楽のレッスンを受けているのである。

能の舞台数と教授日数が最近増えているとの観測(芸団協ホームページによる)もあるが、素人弟子の増加という点では、どうであろうか。謡本を違法コピーして持ち歩く怪しからぬ「愛好者」の横行は、謡文化が空洞化しつつある末期的状況の到来を象徴している。ところが能楽堂に足を向ける人の数は、右の観測を裏付けて増えているように見える。観客の「基礎数」は役者自身の販売努力の成果であるにせよ、公演の数と能楽堂の数から見て、「新しい」観客の増加は確かなことではあるまいか。ようするに謡も仕舞も習ったことのない観客層が拡大しているのであろう。

彼らは恐らく演劇として能を見る人たちである。それは舞台芸術の完成を目指す能役者にとっては理想的な観客であるかに見える。彼ら純粋な観客の存在が、能の実験的興行という冒険に、力のある役者を駆り立てるのであろう。しかしながら彼らはまた「一見の客」でもある。そして彼らが今後の能の運命をある程度左右するようになるのは必定なのである。

能界はいまや仕切り直しの時期に差しかかっているのであろう。それまでの能を支えていた素人弟子層が世代交代を迎えつつあるのが、その最大の原因のように思われる。この世代交代を円滑に進めること—若い観客を一人でも多く弟子として獲得することが、能の将来にとって非常に重要な意味を持ってくるに相違ない。能楽のみならず、洋楽であろうが、こうした被教授者なしでは経済的に立ち行かないのが、わが国の舞台芸術の置かれた現状である。役者の舞台上の努力ではこの構造の変革は不可能であるから、残念ながらこの現状に当面は対応すべく、何らかの形で素人弟子の獲得に努力せ

ざるを得ないのではなかろうか。

現在動員される観客層のかなりの部分が、このような「一見」組であるならば、実験的な試みの盛行も理解出来よう。現代は能が再びすそ野を拡げつつある時代なのである。文化的な遺産を踏まえて、能がその道を深め極める時代は、むしろ今より後に用意されているのであろう。現代の能の前にいるのは元気のよい若いナイーブな観客なのだから、我々は今それなりの対応をしなければ、彼らをも失うことになろう。そうすると我々の手の中には何も残らないことになる。

このような時代に、自由な発想に基づく実験的な興行は、何よりも大切な試みなのである。復曲やコストのかかる「新演出」は、新作同様もしくはそれ以上に「わかりやすさ」を備えている。機動力のある演能集団であれば、比較的安全に新機軸を打ち出しやすいという側面があるから、失敗はあってもこの方向に絶望はない。新演出や復曲には批判が付きまとうが、失敗すれば批判は当然としても、成功例にはしかるべき評価が与えられないと、能界全体がしぼんでしまうに違いない。そして現在は、批判も評価も適度になされつつあるように思われる。能界は賢明な選択をしているのであろう。

ところで新作と復曲と新演出は、それぞれ次元の異なる作業のように思われるが、これが同一次元でなされるのが現代の能の特色である。同じ役者が複数の企画に関わることが多いので、そのように見えるということもあろうが、そればかりではあるまい。新作とは能の中に新しい可能性を探る作業であり、復曲とは学術的な実験であり、新演出とは本来は不断に行われるべき舞台上の営為であるはずであるが、新作が手軽には出来ないこともあってか、復曲作業に舞台作りの面白さを見出し、通行曲の様式性やテキスト上の制約から自由になるべく、役者以外の研究者などの協力を求めて「新演出」が企画されるために、いずれも実験的でかつ商業的な興行という色彩で統一されることになってしまっているわけである。

今後の能界にとって最も大切なのは、古典的な現行曲を演じる場合にも工夫や創意の感じられるような、舞台に取り組む姿勢の「わかりやすさ」ではないかと思う。作品としてはもっともすぐれているはずの古典的な能が、取り組む姿勢の故に最も難解なものとならざるを得ないのは、皮肉なことである。稽古を尽くして自家薬籠中のものとなった能についても、公演に先立って綿密に作品を読み返す努力は、少なくともシテにおいては絶対に必要であろう。人気のある現行曲であっても、研究者が見て意味不明の文句や不可解な演出は数限りなくある。これを理解しない役者が、理解できない観客に見せて感動を生じるような舞台は、もはやあり得ないように思われる。作品を読み込むという地道な努力は、古典的な能の活性化に必要最低限の条件であろう。

現行曲上演に関わる創意工夫ということでは、たとえば能のテレビ放映も、もっと大胆に演出することはできないものであろうか。一九七〇年の万国博覧会鉄鋼館での観世寿夫の

〈善知鳥〉は、円形のせり出し舞台で、しかも照明を使用しての能であった。実際の舞台もすばらしかったが、驚くべきは、テレビで見ても生の舞台に遜色ないほどに感動的であったことである。こうした見本が三十年以前にありながら、依然としてテレビの能が、感動を伝えにくいのは何故なのか。テレビや映画が完全に舞台芸術を圧倒している現状において、能のみならず演劇全体にとっても、マスメディアとどのように向き合うかが、大きな課題となっている。能の場合はこれに適応するしか道がない。放映される以上は、もっと面白く見せる工夫を重ねてしかるべきであろう。

これも芸団協のホームページで知ったことであるが、文化庁は平成八(一九九六)年度より、『アーツプラン』と呼ばれる舞台芸術支援策の導入を始めた。従来の舞台芸術に対する助成施策を「舞台芸術振興事業」「国際芸術交流推進事業」「芸術創造基盤整備事業」の三つの事業に再編成するとともに、新たに「芸術創造特別支援事業」という重点的支援策を加えた由である。「意欲的な芸術創造活動への取り組みにより我が国芸術水準向上の牽引力となることが期待される芸術団体に対して、年間の自主公演を総合的かつ継続的(原則として三年間)に支援するもの」で、「自主公演の総費用の三分の一を限度」とする助成が与えられるという。当然ながら狭き門で、申請書の書き方もかなり大変なのであるが、本気で新しい地平を切り拓くつもりならば、こうした公的助成を獲得する努力を惜しんではなるまい。企業の協賛を得る興行が増えてきたことは、関係各位の努力の成果として喜ばしいが、そもそも能は観阿弥以来幕末まで、公的助成をほぼ独占し続けてきた舞台芸術なのである。現代ではこうした申請には専属の有能なマネージャーが必要になるから、助成の性格上も大規模な組織力をもったグループでないと申請は不可能であるが、可能性のない企画には助成は行われないという厳しさもあるので、助成を受けることが出来れば、それはその演能団体の将来性の証明ともなるのである。不特定多数の観客のみを相手に小規模な商業主義に陥れば、芸は荒れてしまう。むしろこのような形で経営上の安定と野心的な企画を確保し、芸道精進の態勢を作って欲しいものである。